

宿曜道の院政期

— 珍賀と慶算を中心に —

戸田雄介

〔抄録〕

平安時代の中期から後期にかけて占星術で個人の運命を占い、さらにその結果占い出された災厄を祓う祭祀を行う、謂わば占術技能集団である宿曜道が成立する。宿曜道は宿曜勘文と呼ばれる占いの結果を記した勘文を作成、提出する事で貴族社会での信任を確固たるものにしていった。この宿曜勘文の作成こそが、宿曜道の根幹をなす職能だったのである。

冒頭でも述べた様に、宿曜道はこの宿曜勘文を基に祭祀の執行も行ったが、成立当初の宿曜道では祭祀は、あくまで占いを補完

するものであった。しかし、宿曜道は時代が降り鎌倉期に入ると、陰陽道・密教と共に鎌倉幕府や公家の祈祷の一端を担う様になるのである。つまり、占いから祈祷へと宿曜道の中心が移動したのである。

この宿曜道の一つの転機となったのが院政期であった。そこで本稿では宿曜道の院政期にどのような事があったのか考えたい。

キーワード 宿曜勘文、北斗降臨院、北斗本拝供

はじめに⁽¹⁾

近年、陰陽道の研究が盛んに行われている。古くは斉藤励氏の『王朝時代の陰陽道⁽²⁾』等があるが、やはり近年の陰陽道研究の嚆矢となったのは、村山修一氏の『日本陰陽道史総説』に代表される研究であろう⁽³⁾。村山氏の研究は、古代から近世までの陰陽道の歴史を網羅した労作であ

ったが、陰陽道の基本的な定義等あいまいな部分もあり、未だ多くの研究課題を残したものであった。この村山氏の研究の後、小阪眞二氏の陰陽道の儀礼や占術に関する詳細な研究等があるが、なかでも一つの契機をなすのが、山下克明氏の研究であろう⁽⁴⁾。山下氏の研究は、平安時代の陰陽道史を具体的に論述し、陰陽道がその職能の世襲独占をもって成立する事を明らかにし、陰陽道・陰陽師の平安時代を通し

ての、変遷を明らかにするものであった。また、平安時代の陰陽道に就いての最新の研究では、平安貴族社会と陰陽師の関わりを呪詛や邸宅といった貴族の日常的事象から解き明かした繁田信一氏の研究もある。⁽⁶⁾

この様な平安時代の陰陽道をめぐる研究の中で、山下氏により改めて提示されたのが宿曜道の問題である。何故ならば、陰陽道と対抗する様に活動した宿曜道もまた、貴族層の信仰に大きな影響を与えたものであったからである。⁽⁷⁾

この宿曜道に就いての主な先行研究には桃裕行氏の研究がある。桃氏の研究は、それまで不明であった宿曜道の基本的な事柄を明らかにし、本格的な宿曜道研究に先鞭をつけるものであった。⁽⁸⁾ また、山下氏は前述の桃氏の研究をうけて、宿曜道の成立から説き起こし、その終焉に至るまでの経緯を古記録の記事を中心に詳細に論じ、宿曜道の運命勘申が平安時代の貴族社会に如何に影響力大であったかを述べ、宿曜道の平安時代に於ける全容を概観可能にしたのである。さらに三橋正氏は、平安貴族の信仰全体の中に於いて宿曜道がどのような位置づけであったのかを明らかにしている。⁽⁹⁾

しかし、山下氏の宿曜道研究は平安時代が中心であり、鎌倉期以降の宿曜道に就いては、詳細に描かれていない。これは、山下氏の宿曜道観が平安時代をその一つの頂点としていたためではないだろうか。しかし、私は鎌倉時代こそ宿曜道にとって飛躍の時代ではなかったかと考える。何故ならば、鎌倉期の宿曜道は鎌倉幕府という新天地に展開し、また貴族社会においても陰陽道・密教と共に大きな影響力を獲得するからである。(この事に就いては別の機会に述べたい。)

更に、ここで注意しなければならないのは、宿曜道というものが何時の時代にも不変的に存在していたのではないと言う事である。同じ宿曜道という名称で呼ばれるものでも時代により、その思想や形態を変化させて行なったという事である。

宿曜道の成立は平安時代の中頃であるが、その成立以前の宿曜道はあくまで密教の修法を補完するものであった。

宿曜道の前身は、密教修法を行うべき吉日を当時最新のインド暦法により、選び取る術であったのである。しかし、時代が降るに従って宿曜道は得意の暦法を用いた占星術により、貴族個人の運命を占う宿曜勘文作成を目的とする占術技能集団へとその姿を変えていき、ここに宿曜「道」が成立するのである。⁽¹⁰⁾ また、宿曜道は運命の勘申だけではなく、必要に応じて占い出された災厄を祓う為の祈祷も行ったが、成立当初のそれはあくまでも占いを補完するのが目的であったのである。

鎌倉期こそ宿曜道の飛躍の時代であったという展望は先に述べたが、本稿では鎌倉時代の宿曜道への胎動ともいべき宿曜道に於ける院政期、特に院政末期について、それが如何なるものであったのか、また平安から鎌倉へとという時代の過渡期にあたる院政末期という時代の中でその思想や形態をどのように変化させていったのかを検証してみたい。

まず宿曜道の職能の基本である宿曜勘文の内容を分析し、続いて院政末期の宿曜師珍賀と慶算の活動を通じて宿曜道の院政期に就いて考えてみたい。

一、宿曜勘文

宿曜勘文は、宿曜師が実際に個人の運命を占った結果を記した文書の総称である。この宿曜勘文は現在桃氏が蒐集された十六通が「宿曜勘文集」⁽¹⁾として翻刻されており、氏によってその内容毎に分類されている。即ち、①生年勘文②行年勘文③日食勘文④月食勘文の四種類である。

①生年勘文は誕生時刻の宿曜の組合せから、その個人の生涯に渡る運命を占うものである。

この生年勘文の作成は、宿曜師の側もその個人の一生の運命を掌中に握り護持する権利を獲得する重要な意味を持ったのである。この事は藤原伊周が藤原道長を呪詛したとされた事件に於いて、連座して流された宿曜師利源の役割が宿曜道の占術によって道長の運命を占う事であったのに象徴的である。⁽²⁾つまり、呪詛の前提として宿曜勘文が作成されたのである。もちろん、全ての呪詛に前提として宿曜勘文が作成された訳ではないだろうが、宿曜師にとっても貴族個人にとっても一生の運命を握る事の重要性の証左となるであろう。

②行年勘文は一年単位での運命を記したものである。生年勘文に比べて、より細かい運勢が記されるものである。この行年勘文は毎年の年末に宿曜師が持参するものであり、貴族の日記には、その内容に関する悲喜交々が散見しており、毎年の事だけに生年勘文よりもその記事が豊富である。

③日食勘文と④月食勘文は、日蝕と月蝕の欠け始めと蝕の終わる時

刻等を記したものである。これは、直接眼に見える形で勘文の可否の結果が現れる為に宿曜師の評価対象としてうってつけであった。

この様な宿曜勘文の作成こそが宿曜師の活動の根幹を支える職能であったのである。

院政末期の宿曜道は、その活動の中でも特に攘災の活動、つまり祈祷が重視される様になる。もちろん、院政末期以前の宿曜道に於いても祈祷は行われていた。永長二年（一〇九七）七月七日付の宿曜師明算が元興寺別当への補任を請う申文⁽³⁾には

伝燈大法師位明算誠惶誠恐謹言、

請特蒙鴻恩、任道葉勞并公請勞、被恤補元興寺別當職

右明算謹檢案内、依奉公勞蒙朝恩以道業□□官職是縉素前之例也、爰明算苟佗門業久僅御□□、所謂長日御星供・毎年御勘文等也、御葉有無・御慎輕□□兼以知之宿曜術也、余道雖妙無此能乎、上古聖代□□重此道、故以前之輩皆蒙抽賞者也、因茲仁統大法師□西大寺、大威儀師能算先補西大寺、次任法隆寺、於□者不可拳而計、適浴患露誰謂非分望請鴻恩、任道□□勞被恤補元興寺別當職者、將仰奉公之不虛□、明算誠惶誠恐謹言

永長二年七月七日

伝燈大法師位「明□□

とあり、長日御星供と毎年御勘文（行年勘文）を宿曜道の術と認識していた事がわかる。

しかし、やはり明算の時代は宿曜勘文による占星術こそが宿曜道の中心であり、祈祷はあくまで占い出された災厄を除く為のものであったのである。そして、宿曜道の祈祷の本格的な発展は、院政末期に登

場する宿曜師珍賀と慶算の活動の中に見出せるのである。(珍賀と慶算の活動に就いては後述する。)

それでは、宿曜勘文の具体的な検討に移りたい。本稿では主に生涯の運命に就いて占った生年勘文に就いて見ていきたい。

先述の桃氏の「宿曜勘文集」に翻刻される生年勘文は二通である。

一通目は「宿曜運命勘録」の名で「続群書類従」(第九一八)にも載せられているもので、天永三年(一一二二)誕生の男の勘文である。⁽¹⁵⁾二通目は「宿曜御運録」と名づけられた文永五年(一二六八)誕生の男の勘文で六条有康氏所蔵文書である旨が記されている。

これら二通の宿曜勘文は、一通は院政初期の勘文であり、もう一通は鎌倉期の勘文である。この院政初期の宿曜勘文と鎌倉期の宿曜勘文を比較する事で、その中間地点にあたる院政末期の宿曜道に何が起こったのか、ある程度推測する事は可能であると考えられる。

まずは「宿曜運命勘録」と題した勘文であるが、冒頭には被占者の生年月日と誕生時刻及び性別が記されている。先に述べた様に、生年勘文は誕生時刻の宿曜の組合せを基に占うものであるから、生年月日と誕生時刻は占いの基本的事項である。『小右記』(増補史料大成)寛仁二年(一一〇一八)四月九日条に

大納言示送云、左大将女子、一人五歳、一人三歳、産衣焼亡、注置書同焼失煩、令勘宿曜無術、

とあるのは、まさに誕生時刻がわからなければ、宿曜勘文が作成出来ないと言っているのである。

話を「宿曜運命勘録」の内容に戻すと、生年月日時刻に続いて「算

勘」として「自上元庚申歳 距今日所積日数。十六万」五千四百廿八日。」と記されている。これは桃氏によれば、符天曆の上元である顕慶五年(六六〇)の年頭からの日数であるという。⁽¹⁶⁾因みに、『東方年表』⁽¹⁷⁾をあたってみた所、顕慶五年は果たして庚申であり、日数計算も正確であった。

これに続いて、実際に誕生時刻の宿曜の状態を示した「九曜行度」があり、更に所謂ホロスコープを含む「十二宮立成図」が示される。この「十二宮成図」の項で、具体的な本命星や本命宿・本命宮等が示され、「已上件本命属星。常可令祈供。」と締め括られる。そして、次いで簡単に宿曜の始まりとその信すべき事を述べて、実際の具体的運命の勘申に入るのである。

さて、具体的な運命の勘申であるが、この「宿曜運命勘録」の場合には、第一天性章・第二章福章・第三章運命章・第四章諸運章「附門弟朋友」・第五章年章の五章に別れており、それぞれ具体的な占いの内容とその典拠となる經典が示されている。一例を挙げると、人柄を占った第一天性章では、

經云。人馬宮坐人富相解事。承君王愛寵。」有威德。強胆智无怕怖。神爽利。容顏淑麗。」性跡明慎密明。言語能守敬信。老順父母。恭敬師長。終功德。祭神靈不鄙人云々。

といった具合に詳細にその人柄が記されている。

この様な調子で、榮福章では主に財産や地位に就いて占われ、運命章に於いてはその寿命や一生の内での慎むべき年が具体的に述べられている。因みに、この天永三年生まれの男の寿命は七十二を超えると占

われている。

また諸運の項では、門弟・奴婢・朋友等の日常の人間関係に就いて述べているが、この内の朋友運に就いての記述が占いの判例として興味深いので挙げたい。

朋友運

経云。人馬宮生人多朋友。梵天經說者。尾宿坐人少朋友。

右視兩条之說。雖眷屬多々。心相叶奴難有象也。又虚設位在火計二星。因眷屬不快事可出来坎。

つまり、朋友の多少に就いて宮と宿の説が全く正反対だったのである。⁽¹⁸⁾そこで、この勘文を作成した宿曜師は「雖眷屬多々。心相叶奴難有象也」との折衷案を出しているのであるが、この様な場合には、經典の説をそのまま引くだけではなく、宿曜師の裁量により占いの結果が導き出されていた事がわかる。

さて、勘文は諸運章から行年章へと続くが、この行年章に於いては各年毎の吉凶や慎むべき月が簡単に記されている。この「宿曜運命勘録」の場合は、四十一歳から五十七歳に至る十六年分の運命が勘申されている。桃氏によれば、この文書は最後の部分が欠けているそうであるが、⁽¹⁹⁾先述した様にこの人物の寿命は七十二歳を超えるので、行年章も少なくとも七十二歳まではあったものと推測される。

※

以上、簡単に「宿曜運命勘録」の構成を見てきたが、続いて今一通の生年勘文である「宿曜御運録」の構成を見てみたい。

この「宿曜御運録」の構成も、先ずは被占者の生年月日と誕生時刻

から始まり、「算勘」、「九曜行度」、「十二宮位天地図（ホロスコープ）」

と多少名称は異なるものの、「宿曜運命勘録」とはほぼ同じ構成であるが、「宿曜運命勘録」ではホロスコープに付随して記されていた本命属星が、独立した章として第一御本命所属星等篇に記されている。次に全章を示すと、第一御本命所属星等篇・第二天性篇・第三榮福篇・第四災厄

篇・第五病患篇・第六寿命篇・第七御臨終篇・第八行年篇である。この内、天性篇・榮福篇・行年篇は「宿曜運命勘録」と共通する項目であり、二通ともに内容も大差ないものである。その他の項目としては、「宿曜運命勘録」では運命章であったものが、「宿曜御運録」では災厄

篇・病患篇・寿命篇と更に細かく別けられ、また「宿曜運命勘録」の諸運章が無くなり、新たに御臨終篇が付け加えられている事がわかる。

これは、院政初期から鎌倉期へとかけて宿曜勘文の重点が、寿命や死に関する事柄へと推移した結果ではないだろうか。もちろん院政初期に於いても貴族達にとって、寿命の予言は看過すべからざるものであった。例えば、『中右記』（増補史料大成）大治四年（一一二九）閏七月十三日条には、

午時計相逢八条供奉、是禄命師也、明年六十九重厄也、但明年過ハ以七十五寿限也、於明年者雖重厄、非算尽年者、心中欣感耳、と藤原宗忠の寿命の予言に一喜一憂する様子が記されている。

さらに、鎌倉期に入っても『明月記』（合冊版）国文名著刊行会本）安貞元年（一一二七）十二月十六日条に

良算法印送勘文、存外寿考、不図迎六十七年、兄弟十余人之中、七十之齡纔二人、余算幾日乎

とある様に、藤原定家が宿曜師の寿命に関する予言を看過する事が出来ない様が記されている。しかし、宿曜勘文の内容の変化は、貴族社会の要請に単に宿曜師側が合わせた結果ではないと考えられる。それは、宿曜師側の宿曜道の認識の変化に負う所が大きいのではないだろうか。

これも鎌倉期の記録であるが、「宿曜御運録」が作成される前年にあたる『經光卿記』文永四年(一二六七)十月廿六日条には、

今日宿曜師任憲法印入来、有示合事等、其次談云、前相国事大略寿限也、当年行年勘文注載了、十月末日卯酉時可有恐之由勘録了、夏秋之間までハ相府も可相愼之由被存歟、而及今月殊遠行、或吹田、或有馬、匪直也歟、於有馬去六日「己未」西剋所愼令付、十二日乙丑卯剋事切、如指掌、此事雖未代聞食驚、仙洞有召、故被尋仰下、勘録之旨申上、不敵之由有沙汰云々、於寿限者更不可通之趣也、人世中天又是多、於祈祷之驗者此時事歟、当道之名望無比肩之輩歟、可貴々々、(後略)

とある。記事の内容としては、西園寺公相に行年勘文が提出されたが、その勘文で西園寺公相の死期が予言されたので、秋頃までは慎んでいたが十月に入ると遠出を始めたのである。そして予言どおり十月六日に発病し、十二日に絶命したのである。まさに「如指掌」であったのである。この為に宿曜師任憲は仙洞に召され事の仔細を語ったというものであるが、ここで注目したいのは任憲が記者である広橋經光に語った「於寿限者更不可通之趣也、人世中天又是多、於祈祷之驗者此時事歟、当道之名望無比肩之輩歟、」と言う言葉である。要約すると、

寿命は逃れ難いものではあるが、その様な時こそ宿曜道の祈祷が驗力を發揮すると任憲は言っているのである。つまり、宿曜道の祈祷だけが定められた寿命に対処し得る唯一の方法であると主張しているのである。

これは、先に引いた永長二年(一一九七)の明算の認識していた宿曜道と大きく異なっている。何故なら、明算の認識した宿曜道とは「御藥有無・御愼輕□□兼以知之宿曜術也、余道雖妙無此能乎」であったのである。陰陽道等の余道に優れて未来を知る事、まさに占星術による予知こそが宿曜道の主たる職能であったのである。宿曜勘文の内容に死に関する事柄が増えたのは、宿曜道の内容自体が占いから祈祷へとその中心を移したことが原因の一つではないだろうか。つまり、意識的に死に関する内容を宿曜勘文に多く載せる事により、死に対する恐怖をより意識させ、その死に対処し得る宿曜道の祈祷を導くのである。

極言してしまえば、院政初期から鎌倉期の間に祈祷の発達に伴い宿曜勘文の役割も占い自体から、祈祷を行う前提としての宿曜勘文へと新たな役割を与えられていったのではないだろうか。そしてこの宿曜道にとつての大きな転機となったのは、院政末期であった。

二、珍賀と北斗降臨院

第一章の冒頭部分で、宿曜道に於ける祈祷の本格的な発達は、院政末期の宿曜師である珍賀と慶算の活動の中に見出せる事を述べたが、

本章では珍賀の活動を中心に宿曜道の祈禱に就いて考えてみたい。

この珍賀は、『尊卑分脈』（増補新訂国史大系）によれば桓武平氏の出であり、父にあたる珍也もまた宿曜師であった。珍也が宿曜師であったことは、酒井宇吉氏旧蔵『七曜攘災決』奥書に⁽²¹⁾

保安三年九月一日撰州八部郡法隆寺須磨庄以木花木筆書之 生年四十歳也 永久四年三月七日伝授之珍也 日本第百十九之宿曜師珍也之本。

とある事からうかがう事が出来る。また、この奥書からは珍也が保安三年（一〇八三）の生まれであり法隆寺と何らかの關係を有したことが読み取れる。また、この事に関しては『法隆寺別当次第』の第三十二代経尋の項⁽²²⁾（天仁二年—大治四年）に

聰明寺之目代者珍也、字部郡君云々、祿命師也。

との記述がある。

聰明寺は法隆寺の末寺である為、先述の珍也と法隆寺の關係の証左となる記述であるといえるだろう。また、『法隆寺別当次第』では珍也を祿命師としているが、宿曜師と祿命師は記録上も同一人物が多く、珍也を宿曜師とする事の否定要素にはならないと思われる。⁽²³⁾

珍也の活動拠点であったであろう法隆寺は、また興福寺の翼下でもあり『大伝法院本願聖人御伝』⁽²⁴⁾には珍也について

南都興福寺碩学珍也法師。

との記述が載るが、先述の寺院の繋がりと、珍賀以降この法流が興福寺に属する事を考えると不自然な記述ではないだろう。

さて、この様な南都興福寺の宿曜師であった珍也を父に持つ珍賀で

あるが、彼の活動の拠点は、南都ではなく京都であった。

珍賀は清水寺の辺に北斗降臨院と名づけた私堂を営み、その活動の拠点にしたのである。この清水寺は、興福寺一乗院に属していた為に興福寺の宿曜師珍也の息である珍賀が堂宇の建立地を選んだのは頷ける話である。またこの北斗降臨院の建立は、父珍也の代から南都興福寺を拠点としてきた珍賀の本格的な京都への進出の契機であったし、また珍賀自身も強くそれを意識していたであろう事は想像に難くない。

この珍賀の活動は『玉葉』（国書刊行会本）や『山槐記』（増補史料大成）等に見出す事が出来るが、北斗降臨院に就いては『玉葉』承安四年（一一七四）十月二十五日条に、

宿曜師珍賀法橋、清水寺辺建・立一堂、「名北斗降臨院云々」額字先日切々依申請、今日写遣之、件堂造営之願、偏為諸壇越云々、加之、有嚴重無雙之夢想等、雖末世信力之前感応炳焉者歟、仍為結縁所下愚筆也。

との記述があり、夢想により九条兼実が北斗降臨院の額字を書き珍賀に帰依した事がわかる。

この様に九条兼実の帰依を受けた珍賀は、『玉葉』にたびたび登場し日月蝕の正否について暦道と論争を繰り広げたり、北斗供や熒惑星供等を行っている。また珍賀は時の中宮徳子にも祈禱を行っている。

『山槐記』治承二年（一一七八）六月二十八日条の中宮御着帯の祈禱で珍賀は宿曜師慶算と共にさまざまな陰陽道祭や密教修法に交じり星供を行っているが、ここでは、密教界には多くの有験の高僧がいた

にも関らず星供の壇を宿曜師が任されていた事が興味深い。

またさらに、『山槐記』治承二年十一月十二日条には、御産当日のこの日に御産の気色により珍賀が参上し、紅打衣一領を給わったとあり、これについて藤原忠親に理由を問われた平重衡は、

答云、参向北斗堂、「珍賀私所建立也、号北斗降臨院在清水寺坂、」

可祈請申之由、所被仰下也、

と答えたのである。つまり、中宮御産に際しての祈禱を珍賀が仰せつかりその祈禱料として紅打衣一領を給わったのである。

この様な中宮御産の一連の祈禱に宿曜師が関わりだす事からも、この時期に宿曜道の祈禱が星に関する災厄を除く事から、より万能化していった事がわかる。

ともあれ、中宮御産の祈禱という半ば公的な祈禱に関つた事は珍賀の名声を益々高めたであろう事は想像に難くない。実際に『三長記』〈増補史料大成〉建久六年(一一九六)十一月十七日条には

大威儀師珍賀来、今度所望之人々多到祈請之由、頗以自讃

とあり、三条長兼に北斗降臨院の盛況ぶりを語っている。この珍賀の語りからは、北斗降臨院に集まる貴族達の目的が祈請、つまり祈禱であつた事がわかる。この事からも珍賀の活動を通して宿曜道の祈禱が發展していった様子がうかがえるだろう。

※

さて、この様に多くの貴族層の帰依を受けた珍賀とその堂宇北斗降臨院であつたが、実際にこの北斗降臨院に於いて、どのような祈禱が行われていたのだろうか。

この事に就いては、管見の及ぶ限り同時代の資料には見出せない。しかし、永正十五年(一一五八)に儒者の東坊城和長により編纂された『諸祭文故実抄』⁽²⁵⁾という諸祭祀の祭文を集めた書物の第七北斗法の項に

按、此法能可為宿曜師、大畧内典法也、

とあり、また『山州名跡志』⁽²⁶⁾卷三にも

北斗堂 北斗星勧請所也、

との記述がある。

またさらに、この珍賀の孫で後に鎌倉に下つた宿曜師珍誉が、度々幕府の為に行つた祭祀の一つにもこの北斗供があつた。この事から、珍賀の北斗降臨院に於いてはこの北斗供(法)が主に行われていたと推測できるのではないだろうか。

ところで、この北斗供(法)は星辰供の一種に属する祭祀であるが、珍賀の北斗供(法)に就いて考察する前に、この星辰供成立に就いて簡単に述べたい。

日本で成立した星辰供は道教の要素が色濃いようである。⁽²⁷⁾道教では元々北斗七星や北極星への信仰があり、人は生年の干支により北斗七星の一星に属すとし、その星を本命星・本命属星、として個人の運命を掌る物として信奉した。

さて日本では、この道教の北斗祭祀を受け継ぐ形で九世紀初頭、宮廷で行われる四方拝に属星拝が取り入れられ、次いで陰陽師による属星祭も行われるようになった。

一方で仏教には元々北斗信仰は無かつたが、八世紀末頃から唐で道教と密教が習合し、本命星・本命元神信仰が発生してくるのである。

日本での星辰祭祀は唐での経緯を受けたもので宮廷行事、或いは陰陽家の主導で行われる様になったが、では密教の星辰供はどの様な成立過程を辿ったのであろうか。

我が国では十世紀後半期からの律令体制の崩壊に由来し、不安定な権力構造や一族内外の政争に翻弄され没落した中・下級貴族達を中心に来世に救いを求める浄土教が広まる。しかし、一方で個人の栄枯盛衰を生年干支や天体との関係に見だし、それらを祀ることで現世に於いて利益を得ようとする個人的な密教修法も発展を遂げたのである。⁽²⁸⁾

この様な平安貴族社会の動向を背景に成立した密教による星辰供であるが、成立当初には本命星を祀るものが主流であったが、院政期に入ると北斗法にその主流が移っていき、大北斗法や七壇北斗法等大法化していくのである。⁽²⁹⁾

この珍賀が活動した院政末期は、まさに北斗法が星宿関係の修法の花形であった時期であり、珍賀の北斗降臨院の建立もこの流れに沿ったものだったのである。

以上、簡単に星辰供の成立に就いて確認して来たが、後半部で述べた様に北斗供（法）は密教星辰供の一種であった。

またさらに、『門葉記』⁽³⁰⁾ 卷一五四「御修法條々」の「常途勤行御修法事」の項に、山門・寺門・東密それぞれの行う修法が、大法・準大法・秘法・常御修法に分類掲載されているが、それによれば準大法として山門の如法北斗法、東密の大北斗法、寺門の大北斗法があり、さらに三門共に常御修法として北斗法が挙げられており、密教修法としてポピュラーな修法であった事がわかる。もちろん、宿曜師も僧侶で

あるから密教修法を行ってもおかしくはないのであるが・・・。

さて、この珍賀が行っていたと考えられる北斗供（法）であるが、森田龍僊氏によれば、これにはさらに二種類の修法が存在する。一つは、一夜北斗と呼ばれる修法で『宿曜經』⁽³¹⁾ に説かれる北斗七星の降臨日である毎月七日と二十二日に行われる法である。いま一つは本命星供である。本命星供は生年干支によって定められた北斗七星の一星である本命星を中心に供養する修法であるが、本命星と同時に他の六星も供養する為に北斗供と呼ばれる場合もあるとのことである。⁽³²⁾

『玉葉』の北斗供に関する記事の日付を見ると、どれも北斗七星の降臨日に当たる日は無く、したがって珍賀が九条兼実に行った北斗供は本命星供であったと考えられる。そして、北斗降臨院で中宮徳子の御産の日に行った折袴も徳子の本命星を供養する北斗供（本命星供）であったのではないだろうか。

この様に北斗降臨院を拠点として、貴族達に密教修法である北斗供を奉仕した珍賀であったが、では彼は宿曜師である自らが、密教の修法を行う事をどの様に認識していたのであろうか。

ここで注目したいのは『覚禪抄』⁽³³⁾ 北斗法に載る一文である。そこには星供多分当年星奉供也。但宿曜勘文之中。慶厄之星又奉供之。

と記されている。つまり、星供（この場合は北斗法）を行うには前提として宿曜勘文が不可欠であると言っているのである。この宿曜勘文がなければ、如何に高僧・験者といえども修法に取り掛かる事が出来ないものである。そして、その宿曜勘文を作成できるのは、宿曜師だけであったのである。

この様に考えると宿曜師珍賀にとつては、宿曜師こそ北斗供(法)を行うのに相応しい有資格者であり、そしてそれは、まさに宿曜道の祭祀であつたのではないだろうか。

この様な自負が珍賀をしてその堂宇に北斗降臨院と名づけさせ、また後世の儒者に「按、此法能可為宿曜師、大畧内典法也、」と言わしめたのではないだろうか。

三、慶算の北斗本拝供

第二章に於いては、北斗降臨院を拠点とした珍賀の活動を通して宿曜道の祈禱に就いて見てきたが、本章では宿曜道の院政期を語るのに欠かせないもう一人の宿曜師慶算の活動を通して宿曜道の祈禱の発展に就いて考えたい。

宿曜師慶算は「尊卑分脈」によれば、醍醐源氏の出身で園城寺の僧侶である。この慶算の宿曜師としての貴族社会での活動の特徴は、独自の宿曜道祭祀の創造と執行にあつた。

『山槐記』治承二年(一一七八)十月二十九日条には

被行東方祭「三箇夜」宿曜師慶算於雙林寺本堂行之、(中略)仰此祭「東方清流祭、南方高山祭」能算以後無修之人、而能算伝永算、々々慶算之由申二品、仍修之云々。

との記述ある。これは、中宮御産の祈禱として慶算が東方清流祭なる祭祀を奉仕した記事であるが、この記事こそ慶算による独自の祭祀執行の嚆矢である。ここで慶算は東方清流祭・南方高山祭を能算から永

算を経て継承したと称しているが、山下克明氏(前掲5)に依ればこれらの祭祀は珍賀の北斗降臨院を中心とした活動に対抗して慶算が創始したものである様だ。

さらにこの記事からは、慶算の宿曜師としての嗣承を読み取る事が出来る。即ち、能算―永算―慶算である。ここでこの嗣承の始めに記される能算は、『二中歴』の「能歴」宿曜師・禄命師の項にも、その名を載せる宿曜師であり、暦道賀茂家と共同で造曆にも携わった興福寺の宿曜師仁統の弟子である。また『二中歴』には、能算の弟子として深算を、息子として明算の二人を挙げている。

この二人は共に貴族社会に於いて宿曜師として活動しており、特に明算は「宿曜勘文」の章でも取り上げた申文から、天皇への影響力も有した宿曜師であつた事がわかる。

ところで、先の慶算の嗣承で能算の次に位置する永算であるが、『二中歴』にはその名を見出す事の出来ない宿曜師である。しかし、『鎌倉遺文』所収「僧位昇叙例注文」の「法眼叙法印例」⁽³⁵⁾に於いて慶算は「永算大徳弟子」と注されており確認する事が出来る。さて宿曜師としては、能算以降興福寺に属してきた法流を継承する慶算が何故、園城寺に属したかはわからないが、慶算も能算・明算が築いた宿曜師としての基盤を受け継いだであろう事は、想像に難くない。

この慶算と前述の珍賀との関係を考える上で興味深い記事がある。『三長記』建久七年(一一九六)十二月十六日条である。そこには

入夜宿曜師慶算法眼来閑談、主上御本命宿・本命宮、年来珍賀注進辭事、慶算依勘申被改申了、去秋比仁和寺宮令謹行御祈給、則

被衣申御本命宮等、其次此沙汰出来云々、事实者珍賀尾籠敷、

と記されている。つまり、後鳥羽天皇の本命宿・本命宮は珍賀により定められていたが、慶算がその誤りを指摘し改められたのである。この記事からは、慶算が明算以来の天皇家への運命勘申という活動基盤を受け継いだ事や、珍賀もまた後鳥羽天皇に対しての運命勘申権を有していた事がわかる。おそらく、後鳥羽天皇の本命宿・本命宮は珍賀により定められていたのだろう。

そしてまた、慶算がこの事を九条家の家司である三条長兼に語ったという事は、単に宿曜師の職務として、本命宿・本命宮の間違いを指摘したというだけではなく、珍賀への強い対抗意識の現われであろう。この様な慶算の珍賀への対抗意識は、日月食論争にも見出す事が出来る。『玉葉』建久十年（一一九九）正月一日条には

曆道、并宿曜師珍賀、申可正現之由、算博士行平、宿曜師兼一等、申都不可正現之由、宿曜師慶算、同申不可現之由、

とある。曆道と珍賀は食有りとし、算道の行平と宿曜師兼一は不現を主張しこれに慶算も加わり対立しているのである。これについて山下克明氏（前掲5）は、宿曜師の輩出により宿曜師間でも推算結果に異同が生じた為であると考えられたが、やはり、慶算の珍賀に対する対抗意識の発露と見る事が出来るだろう。この様な慶算の珍賀への対抗意識が、慶算に新しい宿曜道祭祀を創始させたのではないだろうか。

さて、この慶算の創始した祭祀には既述の東方清流祭・南方高山祭の他に北斗本拝供がある。

この北斗本拝供については『玉葉』建久八年（一一九七）三月二十

八日条に

宿曜師慶算来、召前使授文殊大北斗經、為本拝也、其次問宿曜道事、一宮多星入人運不傾事、

とあり、さらに同四月二日条には

今日巳時、有北斗本拝事、依有宿曜師慶算申也、仮令、巳年生人、巳月巳日巳時、向巳方、拜本命星也、十三年一度廻遇云々、其儀、着衣冠、「清淨新衣也、」持念誦拜之前、敷淨薦、立白木案、花瓶一口、「差時花、」火蠅一口、「熱名香、」小幣帛九本、「七星外、加羅計料鳥羽院御拜時、如此云々、」南庭儲座、刻報降、居其座、先拜本命星武曲星十二反、次更拜七星、各一反、「但武曲星、加今一拜、為輔星也、又七星外、羅計各一反拜之、」次帰昇、中宮已御歳也、中将又同、仍各有此拜、今旦先洗頭也、

とあって、この祭祀に就いてかなり詳しく書かれている。またこの『玉葉』の北斗本拝供執行に関する一連の記事で興味深いのは、九条兼実がこの祭祀が行なわれた日取りである。

先ず建久八年三月二十八日条では、九条兼実は宿曜道の説について慶算に質問している。原文から推測すると恐らく、九条兼実の本命宮に惑星の犯が続いた為にこの事について尋ねたものと思われる。これについての慶算の答えは、どうやら九条兼実にとって好ましいものであったらしく「一宮多星入人運不傾事」と自らの運が健在である事への感慨を記している。

この様な九条兼実の不安と感慨の裏には、大きな理由があった。この前年に起こった「建久の政変」が原因である。

源頼朝は京での影響力を拡大する為に娘大姫の後鳥羽天皇への入内を画策した。しかし、源頼朝が頼りにしていた九条兼実(36)は、既に娘任子を入内させていたのである。

そこで源頼朝は九条兼実の政敵であり、後白河法皇の側近であった源通親に接近したのである。これを好機と見た源通親は九条兼実の失脚を謀り、建久七年(一一九六)ついに後鳥羽天皇を動かして九条兼実を閑白の座から追い落としたのであった。⁽³⁶⁾

かかる折に、慶算は九条兼実の諮問に対し宿曜道の説を語り慰めているのである。これは、九条兼実の慶算への信任と宿曜道への認識を表しているのではないだろうか。この様に考えると建久八年四月二日に行われた北斗本拝供は、九条家に漂う閉塞感を打ち破り九条兼実の再起を祈る祈祷であったのではないだろうか。

この様に慶算は、九条兼実をはじめとする貴族層に折にふれ宿曜道の説を語り、それに基づき祭祀を執行する事で、貴族社会での宿曜道の祈祷への信任を確固たるものにしていったのではないだろうか。

※

さて、ここまででは慶算の貴族社会での活動を述べてきたが、この慶算の創始した北斗本拝供とはどのような祭祀であったのか。

先に挙げた『玉葉』建久八年四月二日条によれば、十三年に一度、願主の生年十二支と同じ年月日に、その方角に向かい本命星を中心として、北斗七星を拝しさらに、計都と羅喉の二星を拝するという祭祀であった事がわかる。

第二章に於いて院政期には、密教星宿法の主流が本命供から北斗法

へと変化した事は既に述べたが、この慶算の北斗本拝供の創始も一見、この密教修法の流れに乗ったものの様に見うけられる。しかし、ここで注目したいのが、『醍醐寺史料』「遍智院成賢謹修諸法文書私記集」⁽³⁷⁾に載る、慶算から醍醐寺成賢に進上された注進状である。そこには

注進、来五月七日可被修北斗・本命星捧供事

件法者、人生之後十三年一度廻来而、以相応之年月日時、令謹修也、所謂十三・廿五・卅七・四十九・六十一・七十三・八十五是也、庭上調如法供具盡祭礼之、誠奉拝供本命星及虚空星宿也、修之者則非退当年之厄曾、兼消十三年災禍云々、(後略)

とある。おそらく、北斗の修法に就いての醍醐寺僧成賢の質問に慶算が答えたものであろう。

興味深いのは、密教僧である成賢が、密教修法である北斗の修法に就いて宿曜師慶算に質問している点である。何故、成賢は密教修法に就いて宿曜師に尋ねる必要があったのであろうか。

この疑問に答える為に、もう少し注進状の内容を検討したい。その内容は、十三年に一度個人の縁日に庭に供具を調え本命星と星宿を供養すれば、十三年分の災禍を逃れる事が出来るというものである。

これは、まさに慶算が創始した北斗本拝供と同じ内容である。つまり、慶算は成賢の質問に対して、自らが創始した祭祀の日取りを伝えたのである。おそらく、成賢はこの慶算の注進に従って修法を行ったものと考えられるのである。

第二章に於いて、北斗法に対する珍賞の意識に就いて述べたが、今回の慶算の注進状からは、宿曜師側だけでなく、密教側もまた宿曜師

を星に対する専門家と認識していた事がうかがえる。

また、この様な星に関する密教僧からの質問に答える慶算の姿からは、院政期の宿曜道の祈禱の展開が単に貴族社会の要請や密教の修法の流れに沿ったものであるというだけではなく、星に関する言説をリードし、自らその流れを作り出していった宿曜師達の姿が見えてくるのではないだろうか。

おわりに

以上、第一章での宿曜勘文の内容の変化を皮切りに、宿曜道が占星術から祈禱へとその中心を移していく様を院政末期の宿曜師である珍賀と慶算の活動を中心に見てきたが、そこから浮かび上がってきたのは、星の専門家としての宿曜師の姿であった。もちろん、宿曜師が星の専門家である事は今更いうまでもない事であるが、しかし見て来た様な宿曜道の祈禱の発達は、単に貴族社会の要請に沿ったとか、院政期に於ける密教修法の流れに乗った等の消極的なものではなく、宿曜師自身が星の専門家として積極的にその流れを作っていた結果もたらされた変化であったといえるだろう。

この様に考えると、この院政末期の宿曜師達の活動は、単に宿曜道史だけではなく、その後鎌倉期へと続く宗教史の中に於いて、もう少し積極的に評価されても良いだろう。

〔注〕

- (1) 本稿は宿曜道の歴史的事象を明らかにする事のみを目的としたものではなく、他の宗教者と競合する宿曜道の現場に於いて、宿曜師達がどの様に自らの立場を確立して行ったかを明らかにする試みである。
- (2) 齊藤励『王朝時代の陰陽道』甲寅叢書第六編、甲寅叢書刊行所、一九一五年。後に一九四七年に創元社、一九七六年に藝林社から再版
- (3) 村山修一『日本陰陽道史総説』塙書房、一九八一年
- (4) 小阪眞二『安倍晴明撰『占事略決』と陰陽道』汲古書院、二〇〇四年
- (5) 山下克明『平安時代の宗教文化と陰陽道』岩田書院、一九九六年
- (6) 繁田信一『陰陽師と貴族社会』吉川弘文館、二〇〇四年
- (7) 前掲(5)
- (8) 桃裕行『暦法の研究』(下) 桃弘行著作集8、思文閣出版、一九九〇年
- (9) 三橋正『平安時代の信仰と宗教儀礼』続群書類従完成会、二〇〇三年
- (10) 前掲(5)
- (11) 前掲(8) 所収
- (12) 宿曜道を行った僧侶が宿曜師と呼ばれていた事が貴族の日記等により、確認できる。
- (13) 藤本孝一『藤原伊周呪詛事件について』『風俗』十九号、一九八〇年
- (14) 陽明文庫蔵『御堂御記抄』長徳元年紙背文書、前掲(8) 所収
- (15) 桃裕行氏翻刻の「宿曜運命勘録」は続群書類従本に宮内庁書陵部本をあわせて校訂したものである。
- (16) 桃裕行『宿曜道と宿曜勘文』、前掲(8) 所収
- (17) 藤島達郎・野上俊静編『東方年表』(掌中版) 平楽寺書店、一九五五年
- (18) 二十八宿中、被占者が誕生した日に月が所在した宿を本命宿。同じく黄道十二宮中、誕生時刻に東の地平線にかかる宮を本命宮とした。
- (19) 前掲(16)

- (20) 『経光卿記』(『民経記』)は大日本古記録に翻刻されているが、今回引用した文永四年文は未刊行である。そこで、ここでは前掲(8)桃書所収の「鶴體法と寿限」に引かれた記事を用いた。故にここでは書名も大日本古記録の『民経記』ではなく、桃氏の論文中の表記に従い『経光卿記』とした。
- (21) これについては、前掲(8)桃書では酒井宇吉氏蔵となっているが、山下克明氏が前掲(5)書中で酒井宇吉氏旧蔵としておられるので、ここではそれに従った。
- (22) 『続群書類従』第四輯下所収
- (23) 宿曜師と録命師は『二中歴』(『改定史籍集覧』二十三冊所収)に於いても同一人物が多く、また『中右記』に於いても八条供奉なる人物を宿曜師と記したり録命師と記したりしている。
- (24) 『続群書類従』第八輯所収
- (25) 『諸祭文故実抄』については、現在活字本は無く、今回は東京大学史料編纂所が保管する柳原家本のマイクロフィルムを使用した。またこの『諸祭文故実抄』には、北斗本拝供・東方清流祭・南方高山祭・大属星供・本命元辰祭を宿曜道の祭祀として祭文を載せている。
- (26) 『新修京都叢書』第十五所収
- (27) 前掲(5)
- (28) 速水侑『平安貴族社会と仏教』吉川弘文館、一九七五年
- (29) 前掲(28)
- (30) 『大正新修大藏經』圖像部十二所収
- (31) 『文殊師利菩薩及諸仙諸説吉凶時日善惡宿曜經』『大正新修大藏經』二十一卷所収
- (32) 森田龍僊『密教占星法』(下編)臨川書店、一九四一年
- (33) 『大日本仏教全書』五十五卷所収
- (34) 『改定史籍集覧』二十三冊所収
- (35) 『鎌倉遺文』一四八二九
- (36) 多賀宗準編著『玉葉索引・藤原兼実の研究』吉川弘文館、一九七四年
- (37) 西弥生「中世社会と密教修法―北斗法を通して―」所載。『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第八号、二〇〇二年

(とだ ゆうすけ 文学研究科仏教文化専攻博士後期課程)

(指導…斎藤 英喜 教授)

二〇〇五年十月十九日受理